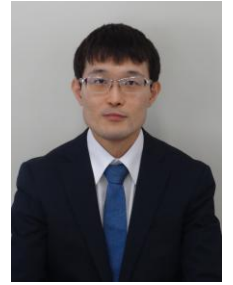


研究タイトル：

『平家物語』諸本の流動と展開に関する研究



氏名： 大谷 貞徳 / OHYA Sadanori E-mail: oya@fukui-nct.ac.jp

職名： 講師 学位： 修士(文学)

所属学会・協会： 中世文学会、軍記・語り物研究会

キーワード： 日本文学、中世文学、軍記物語

技術相談

提供可能技術：

・古典文学に興味があり、実際に古典籍に触れたい方に向けて公開授業や出前授業を行いたいと考えています。

研究内容：

『平家物語』は鎌倉時代に成立して以降、本文が変化し続け、多くの諸本(version)が誕生しました。『平家物語』の特徴の一つとして諸本間の違いが激しいことが挙げられます。諸本の中には書名まで異なるものもあります。

『平家物語』の諸本は、読み本系と語り本系との二つに大別されます。これまでの研究によって語り本系の諸本よりも読み本系諸本に古い本文が多く残っていると指摘されています。私の関心は、そもそもなぜ『平家物語』諸本は二つの系統に分かれたのか、どうして本文が変化し続けたのかという点にあります。このことを明らかにしたいと考え研究を行っています。

『平家物語』諸本の中で、長門本と呼ばれる本文があります。長門本という名称の由来は、長門国阿弥陀寺(現在の山口県にある赤間神宮)に所蔵されていたことによります。この本は、江戸時代の早い時期から世上に流布していた『平家物語』とは異なる内容を持つ本として人々の関心を集め、大名家や知識人の間で書写されました。伝本の中にはその伝来から書写系統がわかるものもあり、人々がつてを頼り長門本を書写していた具体的な様相が浮かび上がってきます。長門本は、20巻一揃いとなっており大部なものでありますが、江戸時代を通して書写され続け、他の伝本との校異を記したり注釈を施し本文を読み解いていこうとしたりしているものも多く確認できます。人々をそこまで突き動かしたものは何だったのか、どのようにして長門本の伝本は拡がったのか、こうしたことが明らかになれば近世における『平家物語』の享受の有り様が見えてくるのだと考えています。このことは単に江戸時代における『平家物語』の享受の話にとどまらず、鎌倉・室町と本文が流動し続けた理由を考える一助となると思われます。